

機関番号：23401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530469

研究課題名(和文) 賃労働社会の起源と展開に関する知識社会学的研究——非労働の意味転換をめぐって

研究課題名(英文) A study concerning the origins of the wage-earning society and the metamorphoses of the non-work on a connection between knowledge and society.

研究代表者

宇城 輝人 (USHIRO TERUHITO)

公立大学法人福井県立大学・学術教養センター・准教授

研究者番号：60381703

研究成果の概要(和文)：本研究は、就業者の大半が雇用され、社会保障が雇用に関連づけられるような社会(賃労働社会)の成り立ちを、以下の3点に焦点をおいて知識社会学的に検討した。(1)労働と非労働の境界線が19世紀末から20世紀前半のフランスでどのように構成されたのか。(2)労働の残余だった非労働がどのようにして人間の本質として経験されるのか。(3)そのような非労働を生きる人間たちの集団生活がどのような空間秩序(都市、郊外)のもとに形成されたのか。

研究成果の概要(英文)：This study examines the origins and the evolution of the *société salariale* i.e. wage-earning society, in which a larger part of the working population is engaged in the salaried work closely associated with the social security system. From a viewpoint of the sociology of knowledge, the study focuses on the following three points: (1) how the borderline between work and non-work in France was formed in the end of the 19th century and early 20th century, (2) how non-work, namely the residue of work, was metamorphosed into the specific existential experience, and (3) what kind of spatializations (urban and suburban) were formed in which the collective life of economically active population experienced such non-work.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：労働・失業・疲労・郊外・社会的なもの

1. 研究開始当初の背景

福祉国家の危機がいわれるようになって以来、とりわけヨーロッパ諸国で大量失業や「新しい貧困」が慢性化して以来、社会保障の有効性がたえず問題とされてきた。1990年代以降の研究動向によれば、社会保障や労働

にかかわる問題は国家財政の規模や配分の調整を越えており、適切に思考するためには問題の問いの立てかたを転換することが必要である。つまり、社会保障のシステムを支える諸概念すなわち「保険」、「雇用(労働)」、「社会的連帯」といった基礎的概念・制度の歴史的成立過程の再検討と、それら諸概念に

よって構成される「問題設定」の認識論的かつ実践的な射程の洗い直しが必要である。

以上のような流れのなかで、制度の構築過程、その実効性、そして制度の存在そのものが社会体に及ぼす再帰的な作用などについて制度論として精緻な研究成果が生まれてきた。わが国でこうした問題関心が高まったのは 2000 年代に入ってからのものである。本研究の研究代表者もそうした関心にそって研究を行ってきた。

しかしながらそうした制度論的な構図においては、諸制度のなかに展開される人間の生は焦点化されないままであったように思われる。制度の生成と変容を跡づけるだけでなく、そのなかに展開される生の可能性の条件、問題としての人間、問題としての生（生活＝人生＝生命）のありようを理解しなくては、社会の変容の意味とその行方を正しく見定めることはできない。そのような発想から本研究は着想された。

2. 研究の目的

本研究の目標は、上述の「保険」、「雇用」、「社会的連帯」などの社会保障システムを支える観念・制度に支えられて成立する「賃労働社会(société salariale)」（大半の人が雇用で暮らし、社会保障が雇用に関連づけられる社会）をめぐる歴史社会学および知識社会学的研究の国内外における動向を踏まえ、制度論的な関心を維持しながら焦点を人間の存在様態におくことで、理論的に新しい局面をひらき、現状分析の視点を刷新することにある。

より具体的にいえば、「働くこと」のまわりを生じている諸問題を次のような一連の問いのもとに問い直すことである。(1)労働と非労働の臨界が 19 世紀末から 20 世紀前半にかけてのフランスでどのように構成され調整されてきたのか。(2)そのさい労働の範疇からこぼれる「生活＝人生＝生命」が残余的な地位からどのようにして実存的な地位に移行し、特殊に問題的なものとして生きられることになるのか。(3)そのような生（非労働）を生きる人間たちが労働の主体として機能するという再帰的狀況が孕む問題点には、どのようなものがあるのか。(4)労働と非労働の臨界が大きく変動しつつある 21 世紀の現在、生がどのようなかたちに結晶しようとしているのか。

本研究は、労働と非労働の臨界を分析するための対象領域として以下の 3 つを設定する。

(1)労働の零度としての「失業」。失業というカテゴリーの成立史については、研究代表者の既存研究成果を敷衍し論点を拡充することで研究を進める。賃労働社会の成立の前提は労働が雇用というかたちに整序される

ことである。労働の雇用化と表裏一体をなす失業は、雇用の制度化のなかで非労働として析出する人間活動の特殊形態である。特殊な非労働としての失業の人間の経験としての特徴を、現代における雇用の非正規化・不安定化による転換を視野に入れながら分析し明らかにする。

(2)人間性の限界としての「疲労」。このテーマについてはすでに予備的な研究を行っており、それを踏まえて研究を深める。人間労働から引き出しうる作業量とそのさいの諸条件の画定と標準化は経済活動と社会政策の基底をなす。そうした思考は人間を「疲労する機械」と見ることで可能になる。疲労が人間機械論の拡張と変異のなかで科学の対象になると同時に、人間の存在論的基底として社会的に制度化される過程を、労働科学や人間関係論の成立史、消費社会論の再検討をつうじて明らかにする。

(3)労働と非労働の転換装置としての「郊外」。このテーマについてはすでに予備的な研究を行っており、それを踏まえて研究を深める。郊外が都市でも農村でもない特殊な生活（非労働）空間（団地）として構築されたのは賃労働社会成立の画期といえる。デュルケム派社会学の社会階級論が都市空間論へと移行する理論史、それと並行するパリ郊外開発の歴史を検討することをつうじて、特殊に「社会的なもの」としての郊外の性格を明らかにする。これにより、雇用と社会保障の危機を経験している現在、郊外に集積する非行・暴力など諸問題への視点をえる。

また、以上の対象領域について明らかにした知見を総合して、賃労働社会における人間の経験の変容のなかに窺える、福祉国家の感受性とも呼ぶべき政治文化の特性についても考察する。

3. 研究の方法

上記目的のために本研究は、可能なかぎり広汎かつ大量の国内外の関連文献資料の綿密な検討を基礎的作業とした。それを踏まえて、(1)非労働の意味転換をもたらした諸制度、諸概念を歴史的に跡づけ、その社会的意味を考察する歴史社会学的手法、(2)非労働と結びつくさまざまな概念が言説空間のなかで占める位置を分析し、またそれが実践として編成される様子を分析する知識社会学かつ系譜学的手法、の 2 つの手法を用いて、研究全体の概念枠組を構成し、それにそって理論的な考察を積み重ね展開した。

4. 研究成果

本研究は、労働と社会政策の思想史にかかわる国内外の先行研究を読み直し、研究蓄積

の幅広さと到達点を確認するところからはじめた。そののちに次の3つを主要な課題として研究を進めた。(1)労働の零度としての「失業」。失業カテゴリーの成立史とその社会政策史的な意義。(2)人間性の限界としての「疲労」。疲労現象の生理学的把握と労働政策への波及、そして「疲労する機械」としての人間観、(3)労働と非労働の転換装置としての「郊外」。郊外団地開発の歴史とその理論的背景をなす社会階級の空間論的展開。

(1)労働の零度としての失業については、労働の法的保護と労働市場という制度的現実を可能にする理論的・実践的な諸条件を腑分けすることを念頭において研究をすすめた結果、次の3つの論点に整理された。

①あらゆる近代的な労働統計の土台をなす労働力人口と非労働力人口の分割にかかわる理論と制度的実践の歴史。労働力人口ないし活動人口という概念が生み出される過程で、ある種の生活状態やある種の社会状態が「労働力 *actif*」という抽象的な概念に対応するものとして再定義される。

②非労働の定位する水準を労働者個人の道徳的ないし政治的な水準から集合体(国民的)の属性である統計的・社会学的な水準へと移行させる理論的概念化の歴史。および統計装置の歴史。この水準の移行の結果として、非労働は、怠惰や反抗の語彙で形成される貧困の系から離脱し、社会的事実の系に属する失業へと転位する。①と②はともに世紀転換期のフランスの統計行政、社会博物館、デュルケム派社会学などのネットワークの集団作業の成果として生じた。

③「労働契約(*contrat de travail*)」という法的概念に集約的表現を見出す労働関係(指揮命令関係)の理論化の歴史。および雇用労働に限らない多種多様な職業活動(職業と見なされないような家事も含め)に広く見られる従属性の諸形態、その法的・行政的取り扱い。社会関係なかんずく職業活動(とくに多様なサービス業)における従属性が、「労働契約にもとづく雇用」という枠組みをとおして見ると、労働と非労働の臨界の一側面を形成することが分かる。こうした一連の編成過程は1880年代にはじまり1930年代まで長期間にわたる判例の積み重ねの結果、生み出された。

以上の3つの論点をすりあわせていくことによって、労働と呼ばれる人間的活動の種別性を浮き彫りにし、むしろ非労働の意味転換の関数として社会的にかたちづくられてきたことを確認した。

(2)人間性の限界としての疲労については、人間が「疲労する機械」として社会のなか存在するようになる、その生理学的、工学的、産業的、経済学的な諸概念の洗練過程を検討した。その結果、次の2つの論点に整理され

た。

①人間と機械の仕事を統一的に把握可能にするために、経済学の基本概念「抽象的労働」と等価に機能する価値尺度を構想し、「力学貨幣 *monnaie mécanique*」の概念として練り上げた産業力学の思想史的再検討。工場の大規模化、機械装置の本格的導入に利用するために復古王政期に構想された力学貨幣は最終的に「仕事」概念へと洗練され完成を見た。この熱力学前史のひとつまは本研究の立場からすれば、労働において支出される量、疲労により獲得される負量が実定的に概念化された瞬間を意味しており、人間が疲労する機械として捉えられるための必須の前提をなしている。

②生理学による疲労の概念化と初期映画による身体運動の分析の相互関連のなかに生じる身体の実定的水準の転位。そしてそこに発見される職業適性などの個人的特性。初期映画の手法のひとつクロノフォトグラフィは身体運動についての知覚を根本的に変革した。この変革は疲労の実験生理学や動作研究・テイラー主義とあいまって人間のポテンシャルという問題設定を形成するにいたる。そしてその問題設定のうえにクレペリンテストや作業曲線が開発される。

以上の2つの論点を総合していえば、「働けない」という身体状態への視線の変容を跡づけることができた。そして疲労という現象が人間と機械の境界領域の形成に果たした意味について考察した。

(3)労働と非労働の転換装置としての郊外については、地理空間のうえで階級やコミュニティのような社会関係を展開し把握する行政的知とその理論的背景をなす社会学的言説について考察した。その結果、以下の2つの論点に整理された。

①モーリス・アルヴァクスの社会階級論からアンリ・セリエによるパリ郊外の田園都市構想と社会住宅建設へとつながる理論的かつ実践的系譜の再検討。19世紀の都市に政治的軋轢として噴出した階級問題は、社会学的認識枠組みのなかに整序されることで、都市空間における人口分布また諸機能の配置の問題へと転位された。この認識は、戦間期にはじまった機能主義的な都市計画と相互補完関係にある。社会住宅は、個人の生活を社会的リスクから保護し、かつ同時に諸個人がもたらすリスク(犯罪、伝染病など)から社会を防衛するという「社会的なもの」の矛盾した機能を具現する要の装置として構想された。このような空間の布置連関は、労働と非労働の分割を様々な側面から制御するように働いた。

②1970年代から80年代のフランス郊外問題の再検討。またそこから生まれた問題であるローカルなコミュニティの構想にかんす

る考察。社会的なものによる成長と安定と包摂を象徴する装置であった郊外団地が失業と排除と暴動の場となったのは、福祉国家、ひいては社会的なもの全般の機能不全を集約的に表現している。機能不全にいたる過程の考察から、新しいタイプの社会的なもの、新しいタイプの包摂、新しいタイプの集団生活が要請されていることが判明した。そこでは、たんに資本主義の変容が労働に変容を強いるというだけでなく、人間の個人的そして集団的な生活の側からも労働と非労働の分割線の引き直しが求められている。

以上の2つの論点を踏まえていえば、人間個人の生活を集団へと接続しかつそこから分離するような装置を、生活の近傍として、ある局所的な「場所」として組織する必要がある。労働と非労働の分割線は、そのさいに重要な役割をはたすものとして引き直されることになるだろう。

以上の研究成果は、部分的にすでに論文または口頭発表のかたちで公表しているが、残りの部分についても遠からずなんらかのかたちで公表する予定である。またその後、全体をまとめた一般書として刊行することを予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①宇城輝人、「場所闘争のためのノート——ローカルな都市、都市におけるローカリティ」、『VOL』、査読無、第4号、2010、88-94
- ②宇城輝人、「力の条件が失われるとき——社会的なものの変容をめぐる」、『日仏社会学会年報』、査読無、第19号、2009、29-39

〔学会発表〕(計4件)

- ①宇城輝人、「雇われることと働くことの間——賃労働社会からの展望」、関西社会学会シンポジウム「社会学が捉える現代資本主義」、2011年5月29日、甲南女子大学
- ②宇城輝人、「力の条件が失われるとき——社会的なものの変容から」、日仏社会学会シンポジウム「パースペクティブとしての〈力〉——暴力・労働・贈与」、2009年10月17日、岡山県立大学
- ③宇城輝人、「労働はまだ社会的なものの基礎たりうるか」、共同研究「社会的なものの思想史」、2009年8月8日、京都精華大学
- ④宇城輝人、「社会的なものとは何か」、共同研究「社会的なものの思想史」、2008年5月10日、同志社大学今出川キャンパス

〔図書〕(計5件)

- ①市野川容孝、宇城輝人(編)、ナカニシヤ

出版、『社会的なもののために』、近刊

- ②遠藤知巳(編)、せりか書房、『フラット・カルチャー——現代日本の社会学』、2010、415(78-85)
- ③佐藤俊樹(編)、岩波書店、『自由への問い 第6巻 労働』、2010、238(115-133)
- ④井上俊、伊藤公雄(編)、世界思想社、『社会学ベーシックス第6巻 メディア・情報・消費社会』、2009、vi+251(199-208)
- ⑤白石嘉治、矢部史郎(編)、以文社、『VOL Lexicon』、2009、188(122-123)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇城 輝人 (USHIRO TERUHITO)

福井県立大学・学術教養センター・准教授

研究者番号：60381703